

平成 30・31 年 期 神 奈 川 県 青 少 年 問 題 協 議 会 第 1 回 企 画 調 整 部 会 議 事 録

日時 平成 30 年 9 月 10 日 (月) 17:40～18:50

会場 かながわ県民センター 3 階 304 会議室

○青少年課長

協議会に引き続きまして、ご出席ありがとうございます。

開会に先立ちまして、改めまして事務方となります、私ども青少年課職員の紹介をさせていただきますと思います。

(事務局紹介)

○青少年課長

また、オブザーバー課として関係課の職員が出席をしております。

(オブザーバー課紹介)

○青少年課

本日は、企画調整部会委員 9 名のうち出席委員 7 名で、定足数を満たしております。

次に会議の公開につきまして、この企画調整部会につきましても、協議会と同様、公開とし、会議の傍聴を認め、議事録を公開することとしてよろしいでしょうか。

(異議なし)

○青少年課長

ありがとうございます。

続きまして、会議の進行ですが、企画調整部会の進行は、部会長が行うこととなっておりますが、部会長決定までの間は、会長に進行をお願いしてよろしいでしょうか。

それでは、笹井会長、よろしく申し上げます。

○笹井会長

それでは、部会長が決まるまでの間、私の方で進行をさせていただきます。

ただ今から、神奈川県青少年問題協議会第 1 回企画調整部会を開会いたします。

【議題 1 部会長、副部会長の選出について】

○笹井会長

まず議題 (1) 「部会長、副部会長の選出について」ということで、選出の方法につきまして、事務局からご説明申し上げます。

○グループリーダー

(協議会「資料 3」に基づき説明)

○笹井会長

ただいま、事務局から説明がありましたが、部会長、副部会長につきまして、どなたかご推薦したい方がいらっしゃれば、お願いします。いかがでしょうか。

特にご推薦がないようですので、事務局から案があればお願いします。

○グループリーダー

はい。事務局の案としましては、副会長と兼務となりますが、部会長を青少年のコミュニケーションに関する課題についてお詳しい藤井佳世委員に、副部会長を、前期から委員としてご参加をいただき、コミュニティ論をご専門とされている坂倉杏介委員にお願いできればと考えております。なお、坂倉委員につきましては、本日御欠席でいらっしゃいますが、事前に「皆様から御賛同いただければ、お引き受けしたい」ということで、内諾をいただいております。以上です。

○笹井会長

ただいま事務局の方から、部会長を藤井佳世委員に、また副部会長を坂倉杏介委員というご提案がございましたけども、皆様いかがでしょうか。

(異議なし)

○笹井会長

それでは、藤井委員、お引き受けいただけますでしょうか。

○藤井副会長

はい。

○笹井会長

よろしくお願いします。それでは恐縮ですが、藤井委員は部会長席へ移動をお願いします。それでは、これ以降の進行を藤井部会長にお願いしたいと思います。

○藤井部会長

ただ今、皆様の御賛同いただきましたので、部会長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

先ほどの協議会でお話しましたように、議論というものは、こうした方がいいとか、こうすべきだと、すぐいえる場合もあるかもしれませんが、どのようにそうになっているのか、何かこめられているのか、どういう課題があるのかなど、様々な観点から議論が行われると、とてもいいのではないかと考えています。疑問等あるいは、考え等を率直にお話いただくことが、充実した議論につながっていくだろうと考えています。どうぞよろしくお願いします。

【議題（２） 協議スケジュールについて】

○藤井部会長

それでは、議題（２）「協議スケジュールについて」に移ります。事務局から説明をお願いします。

○グループリーダー

(協議会「資料4」に基づき説明)

○藤井部会長

ただ今、事務局から説明がありましたスケジュールについて、何か御質問、御意見ございますでしょうか。

(異議なし)

○藤井部会長

よろしいですか。それでは、事務局のスケジュール案に基づき、審議を進めてまいりたいと思いますので、皆さんお忙しいとは存じますけれども、日程調整を含め、御協力をお願いいたします。

【議題(3) 委員意見発表、意見交換】

○藤井部会長

次に、議題3「委員意見発表、意見交換」に移りたいと思います。

先ほど事務局から説明がありましたとおり、中間報告案の検討に向けて、第1回部会から第3回部会にかけて、委員の皆様から意見発表をいただきたいということでしたので、本日はまず、私から意見を述べさせていただきたいと思います。

本日は、私が意見発表させていただきますので、この議題(3)につきましては、ファシリテーターを笹井会長にお願いできればと思いますが、よろしいでしょうか。

○笹井会長

はい、分かりました。それでは、議題(3)につきまして、私の方でファシリテーターをさせていただきます。

それではまず、意見発表と議論ということで、意見発表を藤井部会長にお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○藤井部会長

それでは、お手元の資料に沿いまして、私がどういうことを考えているのか、お話をさせていただきます。

今回、「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」副題として、「青少年のコミュニケーションと育ちを考える」という企画に対しまして、実践検証を行うことが可能であると事務局から説明がありましたので、このように私が考えているという提案を最初のタイトルにつけさせていただきました。色々なコミュニケーションの形態や、子ども・若者の生活空間などを考えていきますと、「非定住の自己形成を支援するような自由なコミュニケーションネットワークを構築する」ということができれば非常にいいのではないかと考えています。現在このように考えているのですが、これについてお話をしたいと思います。

まず、学校教育の中で、コミュニケーションがどのように考えられているか、どのように捉えられているかということをお話したいと思います。事務局の企画の中でも学校教育の中では、言語活動を行うような言語能力を養っていく、これは学習の基盤となる資質・能力というものがあると捉えられています。これは、子どもたちに対して、言語能力や情報活用能

力、さらには問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことが教科横断的にできるようになると考えられています。すなわち、学校における教育活動におきまして、それぞれの視点から子どもの言語能力、これは表現する力だけではなく、論理的な思考力も含みます。自分自身の感情を適切に用いて言葉に表現する、そうしたところも含まれている言語能力という意味です。そういったところを伸ばしていこうということになっているわけです。そういう観点でいうと、学校教育とも連携をとりながら進めていくことができるのではないかと考えます。しかし、学校においては、教育目的に沿って言語能力を育てていきますので、少々子どもの生活や子どもの生活のあり方、過ごし方とずれてくることがあるのではないかと考えています。ですので、連携できるところもあるかと思いますが、学校は教育目的に沿って能力を形成するというを行っていきますので、子どもの生活のあり方、あるいは、子どもの生のあり方という視点からみると、少々狭くなってしまふ、あるいは、そこには少しずれがあるのではないかと考えています。学校教育だけではなかなか十分には育てていくことはできないであろうというふうにもみえると思います。

それでは、情報ネットワーク社会の中で、青少年の育成や支援、青少年のコミュニケーションと育ちをどのように考えればいいのか、学校教育にすべてお任せしてできるものではないとなりますと、どのようにそのようなことを行っていくことができるのか、どのようなあり方が可能なのかということが問われると思います。

確認したいのが、この場合の情報をどう捉えるかということです。情報は、次のように考えられているものがあります。情報は、行為者にとって行動の選択につながるような意味と価値を持っており、認識の不確かさを凝縮するような働きをするのが情報だと、そのように伝達されるものが情報だという理解です。つまり、情報は静的な伝達内容だけではなく、情報を受ける受け手を変化させる動的な作用力を持つものなのです。例えば、私たちが今日は夕飯にフレンチを食べに行きたいという時にネットで検索をしてこのお店にしよう、つまり、情報を自分の行為に変換させて、判断し、その情報に意味を持って、行為者に変化を及ぼしているものと考えられます。ですから、情報は、ただ流れていくわけではなく、それぞれの受け手の行為に影響を及ぼす。意味や価値を持っているものなのだと捉えることができるだろうと思います。情報をやりとりする、リサーチすることは、実はリサーチする人にも影響を与える。そのために、どんな行為をするのか、何を選択するのかということに大きく影響があるというのが、動的な作用力を持つということかと思えます。こうした情報のあり方が、注目すべきところではないかと考えます。

そうしますと、メディアの社会の中で、コミュニケーション、情報のやり取りに限らず、例えば自分が考えていることを相手に伝える、相手の考えていることを受け取るというコミュニケーションが可能になってくると思えます。自分の思いを伝える、あるいは相手が考えていることを受け取って、それがまた何等かの行為でつながっていく。そういう連関が、メディアの社会でもコミュニケーションを通して行われているということです。インターネットのコミュニケーションは、情報の受け手というのが、自分が受けて、また発信することもできますので、ずっと受け手であるのではなく、発信者にもなりえることもあるという特徴があるだろうということです。相互性が求められますし、維持されているように思えます。

また、インターネットのコミュニケーションにおいては、非常に流動的な集団が形成され、別の集団がつけられていくという意味では、流れがそこにあるのではないかと。コミュニケーションはどんどん突き詰めていくのではなく、次のトピックに移動し、また次のトピックに移動し、という形で、流れるように集まりがどんどんできていくだろうということです。また、その空間は、複数の空間が同時に存在するということが、現実の社会におけるあり方とずいぶん異なるあり方であると思っています。そのように考えますと、インターネットの中

のコミュニケーションは、実際の世界とは異なるもう一つの表現の世界であり、新しいリアリティというものがあるのではないか。メディアは、非常に高度な技術によって形成された空間でもあるので、人間の文化によってつくられている一つの空間だと考えられます。したがって、その文化によりつくられたものを使いながら、変容させていくという側面もあるのではないか、いつまでも同じというよりは、文化を形成し、また修正していくとも考えられると思っています。

それでは、ネットワークとコミュニケーションについていくつかお話ししたいと思います。これは、私と同じ専門領域の藤川先生が教育福祉という観点からまとめられた著作です。実は、執筆された方は大学生だそうです。大学生が大学のレポートに書いたことが良かったようで、それを基に書かれたと記載されていました。これは、Twitter を例にとったのですが、集団が自然に発生し、そこに明確な意思というわけではなく、何気なくおこなわれている。非常に手軽であるということだと思います。さきほど、送信者でもあり受信者でもあると話しましたが、演技者でもありオーディエンスでもあるということがそこでは維持されています。Twitter が舞台というのは、明示されない形での緩やかな意味のまとまりを持った舞台がそこに形成されている。時間の制約は特になく、空間的な制約も特にない。なにが制限するかというと、何についてツイートしているかという意味のつながりの制約があるだけです。また、舞台から降りる、離脱することは、非常に容易であるということが、特徴ではないかと考えられています。降りるのが容易だということは、抵抗を感じることなく、自分をフォローしているユーザーのツイートの一部を無視することができるということがそこにはあって、あいまいさゆえの安定性が維持されている。そういう機能が働いているのではないかということです。あいまいな空間であり、かつ、意味のまとまりを持っていて、抵抗を感じることなく離脱することも可能であるが、それゆえに安定性がある程度保たれている。そういう空間が発生しているということです。対面的な相互空間とは、非常に異なる特質をもっているのだと理解することができます。対面的な相互行為の現実世界と仮想空間の舞台というのは、接触する可能性がある。これは、利用者によるとは思いますが、接触をさせていこうとすることも可能だということです。そのひとつの例として、私は、自分の研究の中で、自分の人生を語り、人間形成を捉え直すという研究を進めています。その中で、ある女子学生の方が語った内容の中に、オンラインゲームを進めている中で、ゲームのオフ会での集まりが、自分にとって非常に意味のある集団であったということが語られていました。どういふことかといいますと、オンラインゲームに参加するきっかけは、非常に偶然で、ふと見てそれに参加してみようと思った。オンラインゲームで集まる人間関係というのは、ゲームが好きだという共通項があり、つまり意味のまとまりですね。共通項があって、非常に楽しいと語っています。ゲームは完全に遊びが主体ですので、学校教育のような達成感がもたらされるわけではないが、一緒に遊んでくれる仲間がいて楽しいということでした。こんなに楽しいのだから、ちょっと来てよ、一緒に遊ぼうよと思っている。仲間を増やすことをしている。ゲームのオフ会についても、そこには様々な年齢の人たちが集まるので、大人というものが学校とはまた違った意味を持って現れてきているということです。学校と比較する中で、違いがあるのではないかということが、語られていました。そのように考えると、メディアの空間を通して、子どもの生活や生といったものを支援することも可能なのではないかと、メディアの空間が問題を持っていて、それは駄目なんだという議論ではなく、そこを、子どもの生活の支援といったところにつなげることができないだろうかと思っています。

ただ、子どもとメディアについては、次のような指摘があることもまた事実だと思います。例えば、ネットの世界ではアバターという分身がしばしば置かれるように、人間のキャラ化が促進されていて、特定の情報だけを送受信し、一面的な人格イメージを意図的に操作する

ような空間が広がっているのではないかという指摘です。雑多な情報を切り捨てて、イメージを純化させていく。単純化された人格としてのキャラというものは、様々な情報のノイズをカットしたコミュニケーションが行われているのではないかという指摘です。こういったことは、今日では、例えば誰かとコミュニケーションをしようと思って携帯を持つのだが、それがかえって一人であることの恐怖を募らせる。そういう事態を生んでいるのではないか。自己肯定感のゆらぎを早く解消しようとして同質な人間だけで固まってしまいがちになるのではないかといった問題も指摘されているかと思います。

こうした問題を持ちながらも、多様なコミュニケーションというものを生じさせることを通して、支援するということも可能なのではないかと考えています。多様なコミュニケーションといいましても、たくさんあるかと思いますが、こんなにコミュニケーションは多様なのだということをお話したいと思います。私が授業、ゼミで用いている「反コミュニケーション」というテキストです。コミュニケーションというと、自分のことを分かってくれるとか、そういったことがいいコミュニケーションで、コミュニケーションをしたいということは、分かって欲しいということだと思いがちですが、本当によくわかりあうコミュニケーションが実は楽しいのだろうかという問いかけがなされています。よく分かり合う、相手のことがよく分かるというコミュニケーションというのは、本当に心地いいのだろうか。そうではなく、お互いが分からない部分があるからこそコミュニケーションするという、そうしたところが、コミュニケーションの醍醐味ではないかという議論が進められているものです。私は、すごく面白いなと思ひまして、コミュニケーションで分かる場面、何か分かり合うためにコミュニケーションすると逆にすごく息苦しいと、そうしたことでコミュニケーションが嫌いになることもあるのではないかという指摘だったかなと思っています。

続いて、言葉を用いないコミュニケーションというものがあるだろうというものです。サッカーなど様々な年代の人がサッカーを見て非常に盛り上がっていたり、コミュニケーションをかわしていたりするという側面があるかと思っています。そうしたことと同じように、例えば音楽とそれにあわせたノリなどは、言葉を用いることなくコミュニケーションするという側面が、私たちの生活の中をみてみると意外とあるのではないかということです。スポーツをみて、あるいはスポーツを行うことによってコミュニケーションをする。ブランドという物を持つことによってコミュニケーションをする。クレジットカードなども言語がなくてもお金でやり取りができる。日常の中で、近いところでサッカーの試合などがあると思いますが、言葉を用いない形のコミュニケーションというものは実は普段行っているのではないかということになります。コミュニケーションというと、言葉によってイメージされますが、必ずしもそれだけではないかなと思います。

次に、文化的な差異によって、コミュニケーションが非常に異なって捉えられるという話になります。東京大学の恒吉先生の「人間形成の日米比較—かくれたカリキュラム」に、アメリカと日本では子どもの行為に関して怒り方が違っていたというエピソードです。感情で叱責するのと、権威で叱責するというものです。コミュニケーションの取り方が文化によって異なるというものです。日本では、子どもの感情や罪悪感に訴え、人の気持ちになることを促し、気持ちを改めさせる、例えば「○○ちゃんが痛い思いをしましょう」と周りの人の気持ちになるよう促して、行為を変えさせようとするものです。アメリカでは、私は大人であるので、そういうことをしないで、こうしなさいという形で、人の気持ちになることを介することなく、行為に対して怒ることがなされている。そういう意味では、日本で育て、アメリカ型の叱り方をされると少々腑に落ちないということが書かれていたように思います。こうした、コミュニケーションというのは、文化によって異なる場所があるかと思いますが、通常私たちが行っているコミュニケーションの仕方が唯一のあり方ではないだろうと思

います。これはコミュニケーションには、意図的な役割に応じたコミュニケーションと言葉の使い方とそれ以外にそうしたものから逃れるような形で、言葉の始まりに入るようなコミュニケーションがあるのではないかという話になります。最初のほうは、合理的な言説によってコミュニケーションを埋め尽くしてしまい、語るべき内容の代表者あるいは代弁者としてそれぞれ交換可能な人間としての語りがあるのではないか。例えば、私は教師として、とか、部会長としてとか役割に応じて「こう話さなければならない」、「こうするべきだ」という形でつむぎだされる合理的な言語を指しています。これは、役割の中で求められる言葉を使うというコミュニケーションである一方で、役割になる前の言葉があるのではないかという指摘です。これは、筆者のリングスは、死を前にした人と、生れ出る子どもを前にしたときは、役割を持って言葉話すことはないだろうと書かれています。大事なことは、役割に基づく言語とは異なるコミュニケーションというものが私たちの経験の中にあるのではないかというところで、目配せをしていきたいと思います。

もう一つの入り口というのが、役割と異なるコミュニケーション、君が何を語っているのかというところではないかと思っています。もうひとつ、教育的な観点が入りますが、コミュニケーションというと、非常に円滑でずれがなく進むものが非常に評価が高く、社会性が高いといわれることがあります。しかし、コミュニケーションは、先ほど言いましたように、文化の違いもありますし、言葉を使うことによって思いを伝えますが、ずれというのは必ずありますから、そうした違いの現れをきちんとはいりながらもコミュニケーションが続くという形でのコミュニケーションのあり方というものをもう少し考えていきたいと思っています。

これはコミュニケーションの場所そのものをつくっていくような、そういうコミュニケーションなのかなと思っているけれども、差異や異なりが現れ出て、さらにそれでコミュニケーションというものを考えていくような、そういう場所そのものを作っていくようなコミュニケーションというものが大事なのではないかと考えています。そのように考えますと、浜田寿美男さんが「子どものリアリティ 学校のバーチャリティ」というテキストの中で、長崎の少女の事件を考察していますが、私たちが生身を越えた「制度」にとらわれ、その中で互いに隔てられた「個」でしかないという観念に包まれ、私たちの生きる今が「将来」という不安に襲われているという現実が一方であるだろうと。完全には逃れられないが、その構図にはまりこんで、そこに縛られてしまうありようを、どこかで抜け出して、私たちなりの「生きるかたち」を新たに作り出すことはできないものかという問いかけがなされています。私たちなりの生きる形を作っていくもので、それぞれ人は今の手持ちの力を使って、生きていくわけですから、新たな力が生まれてくるとすれば、それは今の力を使って生きてきた結果であってその逆ではない。教育は、子どもの成長について、目標や目的を持つわけですが、結果としてなるものであって、目標を先に持つものではないのではないかと考えています。これは、日常のあり方は非常に制度的な側面も強く、そこから中々逃れられないと思うことも多くあると思いますが、その中で、私たちなりのあり方というのを作りだしていくことに少し目を向けかえる必要があると思います。

事務局からも少しありましたが、子どもを支えるもう一つの生活環境として、家庭生活とのあり方も非常に重要ではないかと思っています。家庭生活については、多様な家族の形ということで、一般的に共働き世帯やひとり親世帯の増加が言われていますが、これは、夫婦と子どもからなる家族モデルを前提にはできないだろうということにつながっていると思います。家庭支援については、例えば、育てている母親をケアするという形での支援のあり方です。何かをしている人をさらにケアするという方向と、教育に関しては、子どもたち自身が生きる空間として、ケアや関心や結びつきといったものを重視する。スクールホームと呼ば

れている空間も、家庭生活と子どもの環境を考える際の支援の一つになるのではないかと思います。親支援という観点も入ってくる。コミュニケーションを考える際には、必要となるかなと思いました。

これは、情報社会や子どもたちの家庭環境の変化を考える際に二人称の関係から三人称の関係になることをもう少し丁寧に考えるべきではないかという主張になっています。例えば、どうして殺人はいけないのですか、という問いかけに対して、一般的な第三者のことではなく、具体的な人間を考えて問うべきだという返答をする必要があるのではないかという意見に通じています。二人称の経験が、私とあなたという経験が基本になって、三人称の他者の苦しみや痛みをイメージすることができるだろうという主張になります。他者への共感や恐怖の感情というのも、二人称の経験が積み重なって三人称へと進むのではないか。そうすると、ネットの空間というのは、二人称で私、あなたという身体を持った関係ではないこととなりますので、じゃあやっぱり必要ないじゃないかと早急になってしまいがちですが、そうではなく、二人称の経験と両輪で考えることで、この空間というものも必要な分野のものになってくるのではないかと思います。

最後になりますが、子どもの自己形成、特にネットやメディアあるいは、子どもの生ということ考えた場合に、今をすごく充実させていきたいですとか、長期的な10年、20年先の自己イメージが持てない、あるいは、自分自身のリスクとして一つに絞りたくないといった、そうした自己形成のあり方は、定住しない姿の模索ではないかと思っています。つまり、定まった世界に支えられることなく成長し、どのように生きるのかという新しい課題というか、これまで教育は子どもを支えて、しっかりした世界の中で育てて、社会に解放放そうという考え方でしたが、そういう考えというか、課題は定まった世界で支えられることであって成長しながらどう生きていくのか、というところにあるのではないかというように思っています。何かの能力において、日常にないものであっても、社会や生きる世界を構成するものとして子どもを捉えていくことで、非定住の自己形成という課題に応じていくようなネットの空間が構築できないかと考えています。その際、そうした多様なコミュニケーションのあり方というものが、非常に重要になってくるのではないかと考えている次第です。最後のタイトルになるのですが、「非定住の自己形成を支援するような自由なコミュニケーションネットワークの構築」ができないだろうかというものが、私の提案になります。

○笹井会長

ありがとうございます。「非定住の自己形成を支援する自由なコミュニケーションネットワークの構築」について意見発表をいただきました。今後、各委員に意見発表の機会を設けるとお話をうかがっていますが、本日は、藤井部会長から意見発表をいただきました。

ただ今の御発表について、御質問、コメント等ありましたらお願いします。

○田中委員

ありがとうございました。興味深くお話を伺いました。

お話を伺いながらイメージがわいたところがありました。例えば、アバターのお話のところで、一側面が強調されて純化されるということについてです。大学生と接していると、「演じているんだよね」とか、「自分のキャラが」ということが話題にでることが多く、それを助長するようなどころがあるのではないかと思います。自分がこういうキャラだからと、かなりSNSで助長されていて、本当の自分を出せないことにつながるのではないかと感じながらお話を伺っていました。

もうひとつは、そのことにもつながりますが、演じるという点で、限られたコミュニケー

ションの中で、Twitter で反応しないということも選択できるという説明がありました。よくあるのが、それを悪い方に解釈してしまう。自分の中で反応してくれる、Twitter で「いいね」してくれることが通常化していて、ある人が突然「いいね」しないという行為を被害妄想的に考えて絶望的に落ち込んでしまう。「いいね」されないという行為を、それは見なかったのかもしれないし、別に無視しているわけではないかもしれませんが、それを大学生は、絶望的に解釈してしまうことがあり、どうしてそこまで暗く考えてしまうのかなということが現場で、よくおきているので、そのようなことを想起しながらお話をうかがわせていただきました。

○笹井会長

藤井先生、今のご意見についていかがでしょうか。

○藤井部会長

ありがとうございます。Twitter もそうですし、自分のアバターを持つということは、ネットの空間なのですが、行為者としては、自分の現実の世界でのやりとりを反映させていく意味では、境界が曖昧で、自己表現や自己実現のあり方に繋がっていると思っています。

Twitter の話では、「炎上する」ということも日常生活の中のこっくりさん現象に似ているという指摘もあるのですが、現実の世界と仮想の空間の類似のようなものが前提になっているというところがあると思っています。

○笹井会長

ほかにいかがでしょうか。

○墓田委員

興味深くお話を伺わせていただきました。ありがとうございました。

私は、日ごろ関わっている困難を抱える若者をイメージしながら、お話を伺っていました。最初に、「学校教育とコミュニケーション」のスライドで、ひきこもってしまった若者や不登校の子どもをつまづきポイントの中では、藤井先生のおっしゃった自分の言葉で表現するという、言語能力が著しく乏しいということがあるように、現場でも感じています。子どもたちが息を吹き返すような、きっかけになるポイントというのが、「ネットワークとコミュニケーション」、オンラインゲームの中で、「ゲームが好き」が原動力になって共通点を楽しむために、オフ会などで人との関わりができてくるというのが、現実社会の中で今までになかったコミュニケーションのつくり方かなと思っています。なおかつ、支援している若者が入院したときに、親御さんがうちの子どもは、誰も友達がいないとずっと思っていたら、病院に見たことがない、その子は 10 代後半の子だったのですが、40 代くらいの学校の先生や色々な方がいらしたということで、親が見えない、多様なコミュニケーションがオンラインゲームの中にあつたことに驚かされたことがあるので、お話を伺っていると、いろんなコミュニケーションの方法が、現実に対面であるだけではなく、いろんなことがあるのだなということを再確認させていただきました。

もうひとつ、「非定住の自己形成を支援する自由なコミュニケーションネットワークの構築」をテーマにされていますが、実は、私共の団体で、今年 3 月に LINE 相談をしました。いわゆる子どもの悩みの電話相談ですと、1 年間に数十件しかこないのですが、LINE 相談はキャンセル待ちを含めてたった 1 ヶ月で 100 件以上相談がくるということが 非定住のネットワークの空間というものが、私たち以上に現実社会につながっているということを実

感として感じたので、すごく興味深く今後この部会が進んでいくのかと思いました。すごく不思議だったのです。いつも電話相談をしない子どもたちが、LINE相談だとキャンセル待ちがでてくる。次から次へとくるということにびっくりしました。

○笹井会長

ほかにいかがでしょうか。

○牧野委員

お話、ありがとうございました。いくつか思うところがあったのですが、子どもたちを中心に考えても、例えば9月の新学期に、子どもたちの自殺予防のキャンペーンがすごくはられています。学校に行けなければ行かなくていいし、行きたくなければ行かなくていいと言われながら、子どもは学校へは行かなくてはならないかのように受け止めて、自殺してしまう。なぜそこまで繋がろうとしてしまうのかということ、どう捉えたらいいのか。嫌なら切れればいいというのが、一般的な大人の意見だと思いますが、子どもはそうはいかないわけです。制度にとらわれているということだけで済む話ではないように思います。後で、繋がることができなくなるということはどう考えたらいいのか思いながら、課題があると思います。

実は、人は様々な議論や制度の中で、個人として扱われているのですが、それはおそらく、個体というもので扱われているのではないかと思います。しかし、そこでは個体としてあつかわれているのか、ある種の関係性の存在として扱われているのかで、捉え方が変わるのではないかと思います。例えば、今回扱おうとしているテーマについては、議論されて久しいのですが、解決策がない。

事務局にお願いしたいと思いますのは、今回神奈川県はこのテーマを扱うのですが、既に他の自治体で同じことを扱っているところはいっぱいあると思うのです。そこで、どんな議論がなされていて、どんな対策が取られていて、どんな実態になっているか。少し調査できれば、その結果をお知らせいただきたいと思います。

子どもや若者の問題を扱うときに、個人が自立をすればいいという議論になりがちなのですが、個人が自立をすることは一体何なのかが問われていないのではないのでしょうか。自己判断をして、自分で関係を築ければよいという議論もあるのですが、そうではないかもしれない。そういう意味で、今日お話をお聞きしていると、個人が個体として扱われていて、個体と個体が関係を作っている。そして、関係を結びつけているものが、メディアであり、関係のあるところで意味のやり取りをしたり、判断をしたりすることがコミュニケーションであるということになると思うのですが、本当はそうでないかもしれないという問いを立てたらどうなのだろうか、と思いながらお話を伺っていました。

まちづくりをやっていると、大人の関係が問われますが、大人たちはそんなに個人が自立した関係を作っているわけではない。関係の中に取り込まれて自分が社会の中にいると考え、個人はむしろ個体として独立している訳ではなくて、どちらかという、関係性に取り込まれて存在していて、さまざまに実践を行い、まちをつくっているわけです。では、他方でコミュニケーションとは、一体何なのだろうか。こういうことが問われることになる。そのあたり、現場の方々のお話をお聞きしながら議論できればと思いました。

○笹井会長

ありがとうございます。例えば、LINE をついつい深夜までやってしまう。つまり、既読とついて、返信しないとならないという強迫観念があります。いじめに追い込まれるケース

です。関係を切れればいいといっても、それができないということと根っこは同じだと思います。

○牧野委員

今朝見たニュースで、コウテイペンギンというアプリがありまして、肯定してくれるペンギンなのですが、とにかく朝起きれば、良く起きたねとほめてくれる。なぜ、そこまで肯定されたいと思ってしまうのかということも含めて、なぜ、そこまで繋がらなくてはならないのかということをお問わないわけにはいかないと思うのです。昔はSNSがなかったから、ここまで繋がりがたがることはなかったのかもしれない。でも、昔もSNSがあれば皆繋がりがたがったのかもしれない。今の時代がこうだから、こうなってしまうのか。繋がっていかざるを得ない存在として人間があるからそうなのか。もし、後者なのだとする、その時、その時のツールを使いながら、繋がってしまうのではないかとも思います。このことをやはり、議論していきたいと思います。

○笹井会長

他にいかがでしょうか。

○西野委員

牧野委員のお話を伺いながら、そのところを深めたいと思いました。繋がらざるを得ない存在、関係性なり、切られることへの不安というか、本当に肯定されなければ、自分の存在意義がみえないというか。誰かに認めていて欲しいという、本当に強迫的な、切れてしまうことを恐れる若者たちの関係性というものは、どこから来ているのか。色々な情報ネットワークの中で、LINEやTwitterなどがある中で、僕らに、若者たちから一日に何度もたくさんのアクセスが来ますよね。先ほどおっしゃっていたように、やめられなくなってしまいます。夜もじゃあおやすみと言ってから、おやすみのときのスタンプにどれを使うかで、色々深読みしてしまったりして。繋がりが切れることへの不安というか、そのところをどう考えていったらいいのか。やっぱり、安心して受け止められていない、受容されていないというか、そのまま本当にいいんだよと言ってもらえない関係性の中を生きてきて、どこかで誰かに、たった一人でもいい誰かに受け止めて欲しい。それが、ネットの中で誰かに繋がっていく。さきほどおっしゃっていた、「繋がる」、「誰かに繋がってほしい」といったことについて、青少年問題協議会の中で、語り合えていけたらいいと感じました。

藤井部会長の発表に、浜田 寿美男さんのお話ありましたが、ヒントがあるかもしれないと思いました。

○笹井会長

他にいかがでしょうか。

○青木委員

牧野委員のお話から思い出したことがあります。実は昨日、厚木市全体での市民体育祭がありました。地域としても、代表を出さなくてはならず、各自治会長さんは苦労して人を集めて、いやいやというか、無理、無理にスポーツ大会に出てよといって集まったチームで、優勝はできなかったのですが、最後に打ち上げで皆が集まったら、あまり知らない人同士でも非常に会話が進んでいました。何か共通点が一つあれば、おのずと会話が進んで、ネットワークや、結びつきがでてくると思っています。地域で子どもの育成をしているときに、必

ずそういう多様なきっかけ、機会をたくさんつくってあげることが地域の大人の役目だなと思っています。その中で、子どもたちが自分の居場所をどんどん作っていく。作っていくのが早い子どもが中心の人物になるのですが、そういうきっかけをいっぱい作ってあげるのが、地域の大人の役目なのかなと思っています。

ネットの方は詳しくないですが、子どもたちもそれなりに、自分たちで考えてやっているので、問題があるものは、あるのかもしれませんが、人間と人間の会話の方がもっと大切だといつも思っていて、仮想空間よりも現実につなげを作ってあげることが大切だなと思っています。

○笹井会長

ありがとうございました。今までの御意見含めて、藤井先生から何かございますか。

○藤井会長

繋がりというものは、これまで関係性という言葉でいわれてきています。これまで一般的にいわれている考え方として、地域あるいは家族、学校のあり方、世の中が変化することによって、それぞれが個人と関係を結んでいく。そういうことになっていくと、繋がりや関係というものがまた新しい意味を持ってくるし、必要となってくるだろうと思います。そうしたときに、個人というものは、もちろんそれ自体で成立するわけではないと思うのですが、関係のあり方というものが、今のこの社会の中で、特にテーマとなっている情報ネットワーク社会の中では、どういう形になるのか、私自身気になるところとか、関心があるところだとお話を伺っていて思いました。

○笹井会長

ありがとうございました。他に何かございますでしょうか。

関係性を科学するというか、学術的に分析するのは結構難しいのです。構造と個人、関係のアプローチというのは、やはり関係性は動いているのですごく難しいなと思います。でも、それを明らかにしなくてはならない。そういう意味では、牧野委員がおっしゃっている問題の立て方ですね。どこに焦点をあてて、どういうアプローチをするのか、これから大変なことを考えなくてはならないと思いました。

時間の都合もございますので、議題3についてはこの程度とさせていただきたいと思いません。貴重な御意見をありがとうございました。それでは、進行を藤井部会長に戻したいと思います。

○藤井部会長

笹井会長ありがとうございました。

本日の議題については、以上でございます。議題全般や審議テーマ等について何かご意見やご質問がありましたら、ご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。オブザーバー課からご意見あればお願いします。

よろしいでしょうか。最後に事務局からお願いします。

○青少年課長

初回から熱心な御協議をいただき、誠にありがとうございました。

次回の第2回企画調整部会につきましては、10月31日水曜日10時から12時に県庁周辺会議室にて開催します。委員の皆様には、追って、メールでご案内をお送りしますのでよろ

しく申し上げます。

最後になりましたが、私ども事務局は、皆様からの貴重な御意見を県政へ生かしていくため最大限の努力をしております。今後2年にわたり、委員の皆様にはご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

本日はありがとうございました。

○藤井部会長

それでは、第1回企画調整部会を閉会します。皆様お疲れ様でした。

<終>